

北大史学会会報

史 筵 23

2025.12.1

彙 報

◎ 二〇二五年度大会（二〇二五年八月二日）

【研究報告】

張間 丈（大学院文学院・修士課程・日本史学研究室）

「一九一〇―二〇年代樺太開発と朝鮮人・中国人」

内田 桜子（大学院文学院・博士後期課程・東洋史学研究室）

「20世紀初頭オスマン帝国のクレタ島政策―1909年ギリシア国旗掲揚を中心に」

橋本 佳奈（大学院文学院・修士課程・考古学研究室）

「擦文文化期における刻印土器の評価―北海道島日本海沿岸北部を中心に」

【講演】

小山 亮（博物館学研究室・准教授）

「国策紙芝居のなかの描かれない天皇」

末森 晴賀（東洋史学研究室・講師）

「17世紀オスマン朝―ヴェネツィア間の海上秩序」

◎ 二〇二五年度総会（二〇二五年八月二日）

大会に引き続き続いて開催された総会で、北大史学会の委員・会計監査が以下のように選出されました。

【委員】 権錫永（日本史学教員）、吉田拓矢（日本史学教員）、吉開将人（東洋史学教員）、村田勝幸（西洋史学教員）、飯坂晃治（西洋史学教員）、夏木大吾（考古学教員）、佐藤拓海（日本史学院生）、内田桜子（東洋史学院生）、原遥平（西洋史学院生）、小倉龍想（考古学院生）

【会計監査】 松嶋明男（西洋史学教員）

次に二〇二四年度の会計報告が行なわれ、以下の通り承認されました。

I 収入の部

（内訳）

前年度繰越金

一、五五五、二三九円

二〇二四年度収入

四〇六、七二八円

《細目》

会費

三九〇、一五〇円

広告代（北大出版会）

五、〇〇〇円

会誌販売代金

八、〇〇〇円

抜刷代

三、三〇〇円

銀行口座利息

二七八円

合計

一、九六一、九六七円

II 支出の部

（内訳）

二〇二四年度支出 五四五、七八二円

《細目》

『北大史学』六四号・『史筵』一二二号
（印刷代（含抜刷代）および振込手数料） 四五一、〇〇〇円

郵送費（『北大史学』・会費請求書等） 二六、七六〇円

交通費（『北大史学』発送時のタクシー代） 二、三〇〇円

ホームページ用サーバーレンタル料
（含インターネットサーバー更新料） 六四、六三二円

事務費用（ラベルシール） 一、〇九〇円
合計 次年度繰越金 一、四一六、一八五円
一、九六一、九六七円

◎ 二〇二四年度卒業論文・修士論文発表会

（二〇二五年二月二十八日）

大会はオンライン形式（Zoom）で開催されました。

【卒業論文発表】

吉江健太郎（日本史学）「幕末の幕府機構と軍事―文久・元治・慶応
期における幕閣層の変容―」

長尾 昂明（東洋史学）「蜀漢における費禕政権に関する一考察―蔣
琏・姜維と比較して―」

中原 正経（西洋史学）「中世美術における逆遠近法―ビザンティン
美術とロシア美術のアイコンを対象に―」

【修士論文発表】

土田 知之（日本史学）「鎌倉末期東寺領播磨国矢野荘例名の確立過
程―領家藤原氏を中心に―」

曹 錚麟（東洋史学）「宋代における梓潼信仰をめぐる儒家の立
場」

前田 拓海（西洋史学）「第2次世界大戦後のイギリスにおけるレイ
シズム―イーノック・パウエルに宛てて書かれた手紙
から（1968年）―」

柴野 初音（考古学）「小樽市忍路土場遺跡出土種実の研究」

◎ 二〇二四年度博士論文・修士論文・学士論文題目

【日本史学研究室】

●博士論文

倉田 守「幕末期加賀藩の政治と海防」
コジエブニコワ・ダリア

「第二次世界大戦後の南サハリンにおける「混在」生
活」

張 易臻「後藤新平研究―「大日本主義者」の国家構想―」

●修士論文

今井 隆子「近世後期蝦夷地における松前藩の「国法」認識」
佐藤 拓海「室町幕府・鎌倉府間の境界領域における越後守護上杉
氏的位置づけ」

解 進「明治憲法制定過程における君主権制限の一面」
邢 存正「近代日本における司法官僚の行刑改革と国体思想」

土田 知之「鎌倉末期における東寺領播磨国矢野荘例名の確立過
程」

●学士論文

安部広一朗「中世後期京都における蹴鞠と武家」
太田 港人「幕末の大名諮問からみる幕藩関係と公儀構想」

大脇 涼雅「田健治郎通相期と野田卯太郎通相期の通信省と海運政策」

亀井鼓太郎「十一世紀の仏教寺院にみる天皇家と摂関家の思想」

小泉さくら「大山崎神人と応仁の乱」

高山 若葉「衾覆について」

田中 秀幸「織田信長と武田氏・東美濃国衆遠山氏」

名取 由衣「境相論における鉄火起請からみる村の中近世移行期論」

論

成田 陸人「十八世紀後半における朱子学者の学統論と政治思想」

新山 亮「留岡幸助と家庭学校北海道分校」

西山 貢「近世後期の東蝦夷地ユウフツ場所における場所経営」

水谷 駿斗「満洲国協和会「蒙古指導要綱」の成立」

山田実沙季「近世後期における尾張藩の刑吏について」

吉江健太郎「幕末の幕府機構と軍事」

吉岡 秀司「十八世紀における赤穂事件への評価の変遷」

渡辺 岳杜「日本中世における飢饉と戦争の関係性」

【東洋史学研究室】

●博士論文

朝山 明彦「『関帝』の誕生へ―明中後期の関羽信仰」

●修士論文

沈 月超「植林と植民…フランス領アルジェリアにおける外来熱帯植物順化運動」

曹 錚麟「宋代における梓潼信仰をめぐる儒家の立場」

●学士論文

富上 智代「農業集団化に関する中国共産党中央の論争・対立についての一考察―1949年から1956年を中心に―」

安福美由乃「1950年代の新疆西北部における民族関係の諸問題―イリ・カザフ自治州を中心に―」

加藤さえり「9世紀エジプトにおけるコプト社会とアッバース朝政府」

鬼頭 優輝「ワクフ文書から見たマムルーク朝のAwlad al-Nasについて」

川畑 陽人「サファヴィー朝シャー・タフマースプ期における君主の移動」

木内 康裕「麗末鮮初における鄭道伝の仏教批判の変遷とその意義」

長尾 昂明「蜀漢における費禕政権に関する一考察―蔣琬・姜維と比較して―」

白松 照「『後漢書』における後漢末の記述とその歴史観」

黒木小葉津「トルコ共和国における「右派勢力」間の関係―Devlet誌からみる1969―1971年―」

白松 照「『後漢書』における後漢末の記述とその歴史観」

黒木小葉津「トルコ共和国における「右派勢力」間の関係―Devlet誌からみる1969―1971年―」

誌からみる1969―1971年―」

【西洋史学研究室】

●修士論文

小森 双葉「19世紀ウィーンにおける音楽活動とナシヨナリズム―A・デアペリの『愛国的な芸術家のつとめ』(Vaterländischer Kinslerverein) 第2部を対象として」

前田 拓海「第2次世界大戦後のイギリスにおけるレイシズム―イーノック・パウエルに宛てて書かれた手紙から(1968年)―」

山口 萌香「脱植民地期のフランス領西アフリカにおける黒人エリート」

山口 萌香「脱植民地期のフランス領西アフリカにおける黒人エリート」

山口 萌香「脱植民地期のフランス領西アフリカにおける黒人エリート」

山口 萌香「脱植民地期のフランス領西アフリカにおける黒人エリート」

山口 萌香「脱植民地期のフランス領西アフリカにおける黒人エリート」

●学士論文

山口 萌香「脱植民地期のフランス領西アフリカにおける黒人エリート」

石崎 匠美「歴史的記憶法成立から見るスペイン内戦の歴史認識」
江口 聖馬「1990年代のカリフォルニア州における移民管理に
関する歴史学的研究」

齋藤 理美「オットー朝におけるイタリア遠征―オットー1世と
オットー2世を中心に」

田切 香帆「カリニングラードにおけるドイツ・アイデンティ
ティの構築―移行期市民社会の歴史実践に着目して」
辻 和希「旧ユーゴスラヴィア地域における「和解」のための歴
史教育」

中原 正経「中世美術における逆遠近法―ビザンティン美術とロシ
ア美術のアイコンを対象に」〔二〇一五年九月卒業〕

中村 哲人「第一次世界大戦前後のインドナショナリズム」〔九月提
出〕

葉山 朝世「アフリカン・ディアスポラと1970年代イギリス社
会―1970年代ロンドンの黒人コミュニティにおけ
る読書と創作活動に関する議論の歴史学的位置付け」
原 遼平「中世後期北ドイツにおけるビール醸造」

【考古学研究室】

●博士論文

藤原 秀樹「北海道における縄文時代の墓と社会」

●修士論文

柴野 初音「小樽市忍路土場遺跡出土種実の研究」

●学士論文

小倉 龍想「石器群研究と遺跡化モデル―北海道虻田郡豊浦町札文
華遺跡出土の統縄文期擦切磨製石斧の分析による―」

◎ 研究室便り

＜日本史学研究室＞

二〇二五年年度の日本史学研究室は、教員五名、共同研究員二名、
専門研究員七名、博士後期課程六名、修士課程一八名、学部生三六
名、研究生三名、で構成されています（十月一日現在）。

新たに研究室の一員となった学部二年生は九名でした。本研究室
では、夏季休業期間に学部二年生を対象とした研修旅行を実施して
います。今年度は谷本教授の引率で、広島県を訪れました。参加者
との相談で行程を企画し、原爆投下日の広島平和記念式典への参列
や、江田島の旧海軍兵学校公式見学など、同時代の歴史意識を体感
する経験ができました。また、宮島や鞆の津などのフィールドや博
物館では、古文書演習で培われたスキルを応用し、路傍の金石文や
展示史料の解説を楽しむ姿が印象的でした。

九月六日・七日には、橋本教授の運営のもと、全国学会の日本古
文書学会大会が弊学で開催されました（北大史学会も共催の私たち
で、これに加わりました）。これだけの規模の大会の運営をこなす
のは手間がかかることで、個人的にもよい経験になったと聞いてい
ます。またなにより、中世史専攻の院生の皆さんにとって、得がた
い経験になりました。運営面の補助業務だけではなく、全員が登壇
の機会を得て、それぞれに研究発表をおこなったからです。橋本教
授曰く「成功不成功・出来不出来などいろいろな想いが去来したか
と想像するが、人生の貴重な思い出として胸に刻んでほしい。その
反省をもとに、より一層飛躍すればよいと願う」。大会の経験を糧
に、必ずや羽ばたいてくれることでしょう。

谷本ゼミでは、八月に附属図書館で北方資料の、十二月に松前町
で松前藩士家文書の、それぞれ史料調査を実施しています。いずれ

も院生が調査幹事を務め、現状記録方式を活用しての調査です。近世・近代の現物史料に触れる、よい機会となっております。

川口ゼミでは、大学院の夏合宿を実施しました。九月十六日から十八日の二泊三日で、場所は岩手県盛岡市のつなぎ温泉です。研究报告に明け暮れ、最終日には盛岡市先人記念館と原敬記念館を見学した後、梶子蕎麦に挑戦しました。百杯以上を完食した猛者が現れたそうで、嬉しい驚きであったと聞いています。

なお、本研究室の運営に尽力してくださった事務補助員の北山祥子さんが二〇二四年度いっぱいまで退職されました。北山さんは附属図書館・文学部図書室と密に連携し、一万冊を超える研究室の蔵書の総点検、泣き別れになっていた図書の配架先の調整など、労力を惜しまず研究環境の整備に貢献してくださいました。研究室一同、この場を借りて心より御礼を申し上げます。 (吉田拓矢)

〈東洋史学研究室〉

本年一〇月現在、東洋史学研究室は、教員三名、大学院・博士課程六名、修士課程二年生三名、一年生三名、学部・四年生六名、三年生三名、二年生五名、学振特別研究員PD一名の、計三〇名で構成されている。

昨年号の本欄で、末森晴賀氏が着任して久しぶりに教員四人体制になったことを喜ばしいニュースとして報告したばかりだが、残念ながら本年三月をもって梅村尚樹氏が東京大学東洋文化研究所に転出して、現在再び三人体制に戻っていることを報告しなければならぬ。

梅村氏は、東京大学出身で、二〇二〇年四月に本学に採用された。本研究室では、過去、濱島敦俊・津田芳郎・三木聰氏の三代に及んで、中国前近代史が長らく中核の一つとなり、その分野におい

て特に多くの研究者たちを輩出してきた。我々は梅村氏にこうした本研究室の良き伝統を受け継ぎ、発展させることを期待し、氏は実際にその期待に十分応える実績を上げてくれた。在職中、中国前近代史の研究を志す学部生、大学院生が研究室に数多く進学したことは、特に顕著な成果である。急な転出が残念でならないが、教員・学生一同、梅村氏の五年来の多大なる貢献に感謝している。母校での益々のご活躍を祈念する。

現任の各教員の近況としては、研究室主任の佐藤健太郎氏は九月にアルジェリア調査をおこなった。三〇年来の念願がかなったの初訪問だという。着任から二年目の末森晴賀氏は、研究室のオスマン朝史関連の蔵書を拡充したり、他大学の教員と連携してオスマン語史料のデータベースを試験的に導入するなど、本学におけるオスマン朝史研究の下地を整えるべく努めてきた。五月には本研究室が中心となって運営に携わった「日本中東学会大会」が開催され、国内外から院生を含む一五〇名超の研究者が本学に集い、日本の中東研究における本学のプレゼンスを大いに示すことができた。アルバイトとして運営に協力してくれた学生諸君にとってもよい経験になったことと思う。吉開は、本年度前期、親の介護の必要が急に生じたが、佐藤・末森両氏のご理解を得て長期介護休職し、ギリギリのところで介護離職を免れた。院生・学生諸氏にも迷惑をかけたが、休職期間の授業を半年遅れで実施、中共民族政策、遜清内務府、阮福映冊封を講義しつつ、本業の西南中国民族運動史の研究にも無事復帰している。各方面に感謝する。

その他、研究室のニュースとして、社会人院生として本研究室に加わり、長らく研鑽を積んだ朝山明彦氏が博士号を取得したことを特記しておく。また、本研究室と海外との関係においては、博士課程の彦山明志氏が九月から北京大学に留学し、学部生二人が、それ

ぞれストラスブルと台北への留学から帰国したことも報告していただきたい。現役院生・学部生たちがこれらの動向に続くことを願う。

なお、急な教員の欠員については、幸いにも直ちに新規人事が認められ、すでに今夏「中国近代史」の枠で公募がなされ、全国から応募が多数寄せられるなか、目下、鋭意選考中であることを速報しておく。

(吉開将人)

〈西洋史学研究室〉

二〇二五年一〇月現在、西洋史学研究室に在籍する学生は、学部二年生が一〇名、学部三年生が一〇名、卒業論文提出年次学生が一〇名、修士課程六名の計三七名という構成になっており、山本文彦、長谷川貴彦、松嶋明男、村田勝幸、安酸香織、飯坂晃治の六名(敬称略)が教育・指導と研究にあたっています。なお、山本先生は引き続き、理事・副学長として基本的に教育業務は担当せず、大学執行部の業務に専念されています。

今年の三月をもって、砂田徹先生がご退休されました。先生は一九九五年から二九年間にわたり北大で研究・教育にあたられました。この間、二冊の著書(『共和政ローマとトリプス制』、『共和政ローマの内乱とイタリア統合』)とリウウィスの翻訳に加え論文を多数執筆され、日本におけるローマ共和政研究を牽引されてこられました。また、先生が担当される授業は抽選がおこなわれるほど学生に人気がありました。大変寂しい思いですが、先生から受けた学恩に、教員・学生ともに感謝申し上げます。(先生の研究・教育面での業績やお人柄などに関しては、北大文学部同窓会報『楡文』第二六号に長谷川先生が文章をお寄せになっていますので、詳しくはこちらをご覧ください。)

また、安酸先生が昨秋にお子様を出産されました。大変喜ばしい

ニュースであるとともに、女性研究者としてのキャリアモデルのひとつをお示しになっているようにも思います。安酸先生は昨年の一〇月から今年の七月まで、産前産後休暇・育児休業を取得されましたが、この間、山本先生が代わりに演習を担当されました。学生にとっては中近世史のスペシャリスト二名からご指導を受けることとなり、大きな刺激になったのではないかと思います。

教員の研究業績としては、今春に長谷川先生の編著『サッチャリズム前夜の「民衆的個人主義」―福祉国家と新自由主義のはざまへ』(岩波書店)が出版されました。

最後に、今年の四月に私(飯坂)が西洋古代史担当教員として着任したことをご報告します。(飯坂晃治)

〈考古学研究室〉

二〇二四年度の考古学研究室の構成員は、教員三名(文学院に参加している他部局所属の教員を合わせると総数六名)、博士課程四名、修士課程六名、学部生八名の計二二名です。考古学研究室にとつて、二〇二五年度春は、大きな節目になりました。

小杉康先生が二〇二五年三月をもって退職されました。一九九七年四月に北大に着任され、二七年間にわたって考古学の教育・研究にあたられました。北方文化論講座時代もふくめて、考古学研究室の土台形成に果たした先生の役割は非常に大きなものでした。多大なる貢献に感謝するとともに、益々のご活躍を研究室一同祈念しております。また、文学院を兼任しておられた北大埋蔵文化財調査センターの高倉純助教が、札幌国際大学人文学部の教授として異動されました。後任には、二〇二三年度博士修了者の許開軒助教が七月から着任しました。

考古学研究室の新たな教員として、夏木大吾先生をお迎えするこ

とができました。夏木先生は、日本列島における旧石器時代から縄文文化初期にかけての人類社会の復元や、遺跡の形成過程に関する実践的研究を行われています。北方研究を特色としている考古学研究室と高い親和性があり、大いに貢献いただけるものと期待しています。また、文学院の兼担として、新たに総合博物館の中澤祐一准教授が加わりました。中澤先生の専門は、旧石器考古学、人類進化史等であり、研究室の専門領域の幅がさらに広くなりました。今後、大学院生の質や数にもよい影響を与えるものと思っております。

フィールド調査としては、昨年度から発掘を開始した札幌市丘珠縄文遺跡の発掘調査(第二回目)を、今年も予定通り実施できました(二〇二五年八月二九日〜九月一四日)。お世話になりました札幌市教育委員会やボランティアの皆さんにお礼申し上げます。

高瀬教授は、科研費・国際共同研究加速基金と基盤Aを利用して、北海道・千島列島から出土した動物骨に関わるプロジェクトを日本とアメリカで進めています。また、日本学術振興会二国間交流事業でポーランドとの共同研究を開始するとともに、日本列島北部や東北アジアに関わる五つの科研費のプロジェクトに分担者として参加しています。その一環として、湧別町川西オホホック遺跡の発掘調査を継続しています。学内では埋蔵文化財調査センター長を務めているほか、文化庁文化審議会文化財分科会、岩手県・札幌市・石狩市の文化財保護審議会、恵庭市史跡カリンバ遺跡整備検討委員会、日本考古学協会「大学教育と考古学に関する小委員」、考古学研究会全国委員など学外の会議体でも委員長・委員として貢献しました。

國木田准教授は、二〇二〇年度から実施してきた「土器の年代と使用法の化学的解明」(学術変革領域A)の研究プロジェクトが終了しました。一昨年度から開始した「生業動態からみた擦文文化の分

布拡大要因」(基盤研究B)の研究に取り組んでいます。また、二〇二三年度から始まった国立歴史民俗博物館共同研究「小渡遺跡を中心とする十腰内文化の研究」は三年目に入りました。この他に、シブノツナイ堅穴住居群(湧別町)調査検討委員会への出席や、史跡垣ノ島遺跡(函館市)保存活用計画検討委員会の委員長を務めています。

夏木准教授は、「遺跡形成過程分析による北海道の更新世末人類社会の解明」(若手研究)の一環として発掘した、後期旧石器時代の北海道北見市緋牛内20遺跡、同吉井沢遺跡の整理・分析を進めています。また、青森県東北町の長者久保遺跡や北海道利尻富士町の利尻神社下遺跡など北日本をフィールドとした縄文時代の研究を行いました。

今年の考古学研究室からは学部卒業生一名、修士一名、博士修了生一名が巣立ちました。学部卒業生は大学院に進学し、研究を継続しています。また、修士修了者が博物館の専門職に就職しています。今後、北大での経験をいかして活躍してくれることを期待しています。

(國木田大)

